

「星に導かれて」

主任司祭代行 松本 巖

「街の灯りが明るすぎて、星が見えないのです」。

先日、久しぶりに道でお会いした卒園児のお母様が、数年前に博士役の息子が演じた聖劇のセリフを今でも覚えていますと言われました。暗い夜空に輝く星に導かれて荒れ野を進んでいた博士たちにとって、星の輝きは手に取るように確実に明確なものでしたが、虚栄や虚飾で彩られたエルサレムの街に踏み込んだ時に星を見失ってしまったのでした。そして、よりによってヘロデ王の宮殿に行ってしまった博士たちが、宮殿から出てきた時に言ったセリフです。

さて、「幸せになりたい」という願いが、私たちが抱いている共通の、そして根源的な欲求です。私を幸せに導いてくれる「星」を探し、「星」に導かれて歩いていくのが私たちの人生であるとすれば、その人がどんな「星」を求め、どのような「星」に導かれたか、いつどのような状況で「星」を見失ってしまったかによってそれぞれの人生が分かれてしまいます。

今年一年を象徴する漢字が「偽」であったというように、私たちの社会は偽りに満ちており、偽りの星が輝いてもいます。

今から八百年前、イタリアのグレッチオ村でクリスマスを迎えようとしていたフランシスコは、村人たちにお願ひして、岩の洞窟に本物の馬や牛を連れてきてもらい、イエスの誕生の出来事を再現しようとしてしました。粗末な洞窟の馬小屋には何の飾りやイルミネーションもありません。しかし、あったかな光で溢れていたそうです。そこには本当に必要なものだけがあったからです。フランシスコと村人たちは味わったのでした。自分たちのために貧しくなられた神が、自分たちと共におられ、自分たちは神の民として互いに結ばれているということを。

「幸いなるかな、貧しき者・・・神の国はあなたのもの」

クリスマスに馬小屋飾り(プレセピオ)を飾る伝統は今や、フランシスコ会の修道院から世界中の教会に広がりました。高円寺教会の門の脇にもあります。

かいば桶に寝かされた幼子を見つめるときに、私たちは何を感じ、何を味わうのでしょうか。

新しい年も、忙しさや物の豊かさに惑わされずに、私たちを幸せに導いてくれる「星」に導かれて一步を進めていけますように。

主のご降誕と新年のお喜びを申し上げます。